

世界のクリスマス フィリピン共和国

フィリピンのクリスマスは、イースターと並んで国民の九十%近いキリスト教徒にとって重要な宗教行事であると同時に、教会の行事の枠に収まり切れない国家的社会的宗教事象でもあります。この国のクリスマス(パスコ)は、アメリカや日本のクリスマスセールに見られるように商業的であり、大衆娯楽でもあり、年末の休暇であると言う意味で社会的行事ですが、そういう「目に見える」パスコの背後に民衆に浸透したキリスト教の宗教性を秘めているように見えます。

一年のどのあたりからクリスマス準備が始まり、「ご降誕」を待ち望み、「聖なる夜」を祝う雰囲気醸し出されるかということについては、様々な説がありますが、たいの国よりはるかに早くクリスマスへの序章が始まるのは確実です。十一月の諸聖徒日が終われば、巷には御生誕

に関連する「やや派手な」イルミネーションやクリスマス・ソングが流れ始め、何やら華やいだ雰囲気が町や村を覆います。降臨節が近くなると、地域や家庭でもクリスマス飾りつけが始まります。中でも独特な飾りは、「パロール」(竹ひごで星形の枠組みが造られ、そこに色紙やガラスが貼られ、近年では電飾が施された「希望の星」の飾り)です。パロールは、質素なものから高級なものまで、大小混ざってそれぞれの住宅、施設、学校、会社や官公庁の玄関を彩ります。もともと村々で竹棒の先端に吊るされた星飾りだったようですが、その起源は、スペインのアンダルシアにあるといわれ、北アフリカからスペインに持ち込まれたイスラム教の徴が、キリスト教徒によってクリスマス飾りとして用いられたものだと いわれます。これだけでも、この国に宣教されたキリスト

教の複雑な歴史が垣間見えるようです。降臨節前主日から各地の教会でもクリスマス準備が始まり、それに続いてロハス通りの「国家クリスマス・ツリー」に大統領が点灯します。ご降誕日の二週前から毎朝(超

子供たちの早朝の楽しみになっていきます。この国で育ったクリスマスチャンならだれでも子供の時の楽しい、そしてちょっと厳かな体験として、「雄鶏のミサ」は教会生活の重要な思い出となっています。

この時期、カトリックでは、お昼前後のロザリオの祈祷会がパリツシュ(教会区)の少し大きな家で開かれ、各教会の説教では、今年恵まれた人も恵まれなかった人も、豊かな人も貧しい人も一緒にパスコを祝うことが強調されました。そこで都市の個人や地域や村の教会でホワイト・ギフト(ある朝、経済的に恵まれぬ人や地域に無名で配られる、食料や生活必需品のギフトパック)が準備されます。また近所のお年寄りや子供にジンジャーブレッド等の食物が用意されます。ちよつとスノビッシュですが、聖夜に飢える人がいてはならないという「カリタスの教え」は、クリスマスの方の精神となっています。この時期、子供たちが家々を回って小遣いをねだる



早朝ミサ(早朝三時〜五時のミサで「雄鶏のミサ」と呼ばれる)が始まり、驚くほど多くの親子が、出勤前、登校前に最寄りの教会に通います。大きな教会の参道には露店が出て、温かい飲み物や軽食、特に季節の餅菓子(プトブンブン)が売られ、親に連れられて来た

習慣がありますが、都市では禁止される傾向にあります。そしていよいよご降誕日、イブ礼拝からクリスマス礼拝まで教会によっては数回のミサが行われ、「善男善女」でなくとも、多くの人が出席します。ケソン市にある聖路加病院のチャペルも医師や看護師や患者でいっぱいになりますし、隣にある聖公会の聖マリア聖ヨハネ大聖堂でも、私が滞在していた時期には、二〇〇人以上の人々が詰めかけました。ちなみに、その数はケソン市の聖公会全信徒の数を上回ります。夜も聖堂に多くの路傍に働く人々や近所の人々が、教派を超えて聖公会のクリスマスにやって来るのです。当時のアペリオン主教は、この人々を受け入れ、教会への何よりのギフトだと言っておられました。マリガヤン・パスコ(クリスマスおめでとう)。

この時期、カトリックでは、お昼前後のロザリオの祈祷会がパリツシュ(教会区)の少し大きな家で開かれ、各教会の説教では、今年恵まれた人も恵まれなかった人も、豊かな人も貧しい人も一緒にパスコを祝うことが強調されました。そこで都市の個人や地域や村の教会でホワイト・ギフト(ある朝、経済的に恵まれぬ人や地域に無名で配られる、食料や生活必需品のギフトパック)が準備されます。また近所のお年寄りや子供にジンジャーブレッド等の食物が用意されます。ちよつとスノビッシュですが、聖夜に飢える人がいてはならないという「カリタスの教え」は、クリスマスの方の精神となっています。この時期、子供たちが家々を回って小遣いをねだる

この時期、カトリックでは、お昼前後のロザリオの祈祷会がパリツシュ(教会区)の少し大きな家で開かれ、各教会の説教では、今年恵まれた人も恵まれなかった人も、豊かな人も貧しい人も一緒にパスコを祝うことが強調されました。そこで都市の個人や地域や村の教会でホワイト・ギフト(ある朝、経済的に恵まれぬ人や地域に無名で配られる、食料や生活必需品のギフトパック)が準備されます。また近所のお年寄りや子供にジンジャーブレッド等の食物が用意されます。ちよつとスノビッシュですが、聖夜に飢える人がいてはならないという「カリタスの教え」は、クリスマスの方の精神となっています。この時期、子供たちが家々を回って小遣いをねだる

司祭デオヌシオ 遠藤雅己
神戸聖ペテロ教会副牧師、
神戸国際大学教員